

# ウィリアム・ド・モーガンのタイル

*William De Morgan's Tiles*

author 竹多 格 | Itaru Takeda

ただだいたる——INAXミュージアム推進グループ/1952年生まれ。京都工芸繊維大学大学院無機材料工学専攻修了。1979年、伊奈製陶(後のINAX、現LIXIL)入社。外装タイル工場技術課、仕入商品管理、博物館設立準備を経て、現職。

## [クローズアップ・タイル]

タイルパネルに見る手描きタイルの魅力——1

ウィリアム・ド・モーガンの手描き転写による多彩草花文タイル、12枚張り。いずれも原画はド・モーガンが描いたもの。自身も魅力的に感じていたトルコのイズニック窯で制作された16世紀のタイルの特徴を捉えて創作した[19世紀/152×152mm/イギリス]



## [タイルのデザイン]

タイルの図柄——2-6

図柄は、デザイン化された花、鳥、蛇、小動物、船など多彩で、当時ヨーロッパで人気だったイスラーム圏のタイルの復元も数多く手がけている。特に、ターコイズブルーの色使いなどは顕著である

2—“Bedford Park Daisy”[19世紀/154×154×10mm/イギリス]3—“Bedford Park Daisy”[19世紀/157×157×12mm/イギリス]4—“Double Carnation”[19世紀/202×202×13mm/イギリス]5—“BBB-Yellow”[19世紀/157×157×12mm/イギリス]6—“Fantastic Bird”ラスター彩タイル[ものづくり工房復原品/152×152×10mm]

## [タイルのある風景]

ロンドンのパブ「The Tabard」——7,8

1880年創業の老舗のパブ。インテリアにド・モーガンのタイルが張られている。図柄は、イズニック調の花と鳥をあしらった反復デザイン

7—外観:設計は、リチャード・ノーマンショー|8—店内

- 産業革命後の19世紀後半のイギリスでは、機械化による大量生産が主流となったため、建材としてのタイルの供給も可能となり、一大建築ブームが興った。タイルも象嵌、転写、レリーフなどさまざまな加飾技法が考案され、中産階級を中心とする富裕層の間でもはやされた。完成度の高さでも現在に引けをとらないものであった。こうした技術力を背景にした大量生産であったが、絵付けの作業だけは分業化され、人手によるものであった。しかも、工場での絵付けは単純作業の繰り返しで、工場労働者の仕事は“人間疎外”と言われ社会問題にもなった。
- こうした社会問題に警鐘を鳴らしたウィリアム・モリスと共に、アーツ・アンド・クラフツ運動を推し進めた重要な芸術家のひとりウィリアム・ド・モーガンである。ロイヤル・アカデミーに学んだド・モーガンは画家の才を有しただけでなく、想像力に富んだ機械工、化学者、技術者でもあった。1860年代初頭から、モリス商会にタイルや家具のデザインを提供し、1870年代に入ってから自前の工房を構え、気の合う仲間の職人と共に、自らデザインした図柄のタイルを手づくりした。原料調合や窯などの設備も自ら設計した。こうした製作過程の全工程を自分の目で確かめながら進めることで、達成感のあるものづくりを目指したのである。
- ド・モーガンは、決して一品ものの芸術作品をつくらうとしたのではない。手づくりの魅力を求めながらも、タイルが壁に張り込まれる建材であることを強く意識していた。そのために、生産効率のある“手描き転写”という技法を編み出した。当時の量産方式では、転写紙は、印刷技術によって全く同じ図柄のものが短時間に大量につくられるのが常であった。しかし手描き転写では、ド・モーガンが描いた原画を職人たちが薄紙で輪郭を写し取り、その後、原画を見ながら筆で色付けして1枚の転写紙を仕上げる。つまり、輪郭写しから着彩までがすべて人の手に委ねられた。その結果、デザインは同じだが、それぞれに個性あふれる一枚もののようなタイルが量産できたのである。
- ド・モーガンが考案したもう一つの技術に“ルビー・ラスター彩”がある。13-14世紀頃にペルシャで確立されたラスター彩をもとにしているが、当時にはなかった金属光沢の赤色が特徴である。
- ド・モーガンのタイルは、量産品よりも高価であったが、財を成した中産階級の間で人気を博し、彼らの邸宅の豊かな生活空間を彩った。その手づくりの美しさは、今もイギリスの人々に愛され続けている。

— ここで紹介しているタイルは「世界のタイル博物館」で常設展示しています。

